

# 埴谷雄高、 散在する存在 の中で

——『死霊』統合計画(二)——

荒木優太

『死霊』統合計画では、『死霊』における組織展開の内容を読み込んだ。それを簡単に復習すれば、組織は大量の成員（予備軍）を広域に獲得し、彼らを位階制によって組織化する。そして持続可能性を高めるため不断にその組織化が続けられていく（監視や秘密排除）ということだった。しかし、組織の成員は水平的紐帯を欠いており、生活圏を少しでも越えてしまえば、同じ成員であるにも関わらず互いに見知らぬ他人同士でしかないという奇妙な関係がそこでは作られる。

ここにスパイリンチ事件のグロテスクさがあった。というのも、『死霊』本編を読んでみても分る通り、スパイを殺害する成員達は決してスパイ（密告者）の顔見知りではなかった。リンチを提案した三輪高志にしる、リンチを実行した一角犀という男にしる、彼らは密告者との付き合いがある訳ではなかった。つまり、リンチ事件は出会ったこともない成員同士が、反組織的な行動を巡って、同じ組織に属しているという理由によって殺人を共同で犯してしまった事件であった。

所属地域の違う個々ばらばらな成員が、ただ成員であるという理由で、一スパイの暗殺に動員される。敢えていえば、この不条理な感覚こそ、作家埴谷雄高が永年変わらず保ち続けた本質的なテーマだった。組織に属しているだけで、誰とも知らない人間の殺人の片棒を担がなくてはならない。逆からみれば、組織的規範から逸脱しただけで、誰とも知らない人間から殺害されねばならない。この不条理な感覚は狭義の政治論的問題を越えて、で予告した通り、形而上学的な存在論的問題へと分枝していく。そのポテンシャルは例えば「われならざるわれ」という語に込められている。

「この長篇小説はいわゆる観念小説で、その章のその部分では、『われならざるわれ』という主題を暗示する一挿話として、まず、この世の何処にもありそうもない、極めて非現実的な、幻想的な話を展開し、そして、それに対応するごとくに、つぎに、現実的な、生々しい現代の挿話として、革命運動のなかのスパイの話と並べてみようとしたのであった。ところが、現代における『われならざるわれ』の典型として取りあげようとしたこのスパイの話は、幾度やりなおしても、メロドラマふうで深味のない推理小説といったていさいのものにしか仕立てあがらず、私は、ついに、私が屢々おちいっているところのにつちもさっちも進めぬ、永劫の足踏み状態といった苦境にはいりこんでしまったのであった」（「二重操作の顔」 / 『映画芸術』昭四一・七）

このエッセイは埴谷が『死霊』五章を書きあぐねている時期に書いたもので、恰もスパイの話は書けずに終わったかの印象を与えるものであるが、でもみたように、その対位は最終的にはしっかりと書き込まれている。我々はこの文脈でいう所の「非現実的」方面は後段で考えていくが、しかし、スパイが「われならざるわれ」であるということはそもそもどのような意味なのだろうか。

で組織の成員は上位下位の位階制のもと、それぞれの役職を与えられることで、己のアイデンティティ（自己同一性＝帰属性）を獲得していることを考えた。このことで、独自の思考を他人の思考に明け渡す作用も促されたわけだが、ここで考えるべきことは、スパイのアイデンティティとは何かという問題である。

通常、成員は上位者から役職を与えられ、それに従事することで、組織での成員としての「私」を獲得していく。これと同じく、スパイにも役職や任務が与えられる訳だが、しかしそれは通常の成員と違って二重化している。つまり、組織での役職は体裁に過ぎず、その背面で組織外的な意図をもって行動せねばならない。帰属は組織と組織外とに二重化してしまう。そのため、スパイは本音と建前が過剰に分離し、嘘が常態化し、二つに引き裂かれてしまっている。このようにみれば「われならざるわれ」とはこの不一致や引き裂きを常備してしまった存在者だと考えられる。換言すれば、「われならざるわれ」とは自分の思い通りにならない自分を背負わされた不自由な自己、異和を抱えた自己に他ならない。一方でスパイは組織に潜

り込むことで、組織内アイデンティティが供給される。だが、他方でそれを肯定してはスパイであり続けることはできない。スパイがスパイでいられるためには　スパイとしてのアイデンティティを保つためには逆説的に　、組織でのアイデンティティを無限に否定し続けるしかない。「われ」を否定する「われ」、帰属を否定しながらその場に留まり続けなければならない「われ」、分裂した「われ」がその意味なのだ。

それでは、埴谷がいう処の『死霊』のスパイ殺人事件と「対応」する「非現実的」な挿話とは何だったのだろうか。三輪高志がスパイリンチ事件の告白をする前、高志の部屋に来ていた首猛夫が三輪与志にそして間接的に三輪高志に　語った「死者の電話箱」と呼ばれる一連の挿話がそれに相当する。

「死者の電話箱」は「樽のなかのヘルクレス」と呼ばれているある医学生が作った道具で、箱の中央部に長い指針がついた計測器が三つ備えられ、病人の耳にゾンデを差し込むことによって、患者の生と死の段階に応じて反応が示される。ゾンデは耳から脳のなかへ入り込んでいき、「オペレーター」が伝声管に向かって呼び声をかけると、鼓動が止まり死者に限りなく近くなった患者の意識が針に反応する仕掛けとなっている。それがその装置の第一段階だ。

しかし、間もなくその死者の意識は消えうせ、計測器は第二段階に入る。死者の意識が「分解の王国」に入るのだ。そこからは、ある信号が送られ、それを翻訳すると「何故にわれをなおとらえるや。われはわれならざるわれなり」というメッセージになる。ここでは脳内のゾンデから金属製の無数の足が伸び、それが網の目を作って「われならざるわれ」を補足している。

これが「非現実」な方面での、そして存在論レベルでの「われならざるわれ」だ。組織論レベルでの「われならざるわれ」では組織と組織外との狭間で引き裂かれたスパイが妥当していた訳だが、今度の存在論レベルでの「われならざるわれ」は個人（個体存在）とその外部との間で引き裂かれた幽霊がそれに相当するものとして描かれている。

今、その外部と曖昧に書いたが、それは装置の第三段階になって、より明瞭な名称を与えることができる。つまり、第三段階は「分解の王国」に入った死者の意識と別の死者の意識とを繋げてみる操作を指す。与志はそれを聞いて次のように言っている。

「蛸の足装置の第二段階がそこでさらに最後の第三段階へ向って切り替えられると……ついにそこまで達すると、もはや誰の目にも明らかなように、それは《死者の電話箱》でなく不思議な対話がそこで行なわれる《存在の電話箱》になっていなければなりません！」(『死霊』五章)

この挿話での「われならざるわれ」とは、個人と存在との狭間で引き裂かれている幽霊のことを指す。より詳細に言えば人称的な個人が死とそれに伴う分解の契機を経て、その個性性が解体されていき、ついには非人称的な存在の次元へと還元されていく過程が一連の挿話の要約的内容なのだ。その特徴的な後で引用するが、医学生の装置の原理を解説して、首猛夫は与志に次のように語っていた。

「死者の意識のそれぞれの断片は、死の経過のなかで、さながら連結器がはずれた車体の集団のようにそれぞれ互いから離れてゆくという独特な解釈によって〔その装置の操作が〕できあがることになったのだ。いいかね、与志君。つまり、暗い頭蓋のなかで一本につらなっていた怖ろしいほど長い隊列から、まず貨物車ははなれ、客車ははなれ、機関車ははなれ、そして、その一つ一つの車体がばらばらになって無数と思える横の待避線のなかへはいりこんでしまい、そして、ついには互いにまったく関係なくここかしこに散らばってしまう」(『死霊』五章)

埴谷存在論の典型となるような集合論的発想がここに表れている。つまり、あらゆる個体存在はそれ自体で独立しておらず、機関車が複数の車体で構成されているように、無数の構成要素（成素）とそれらが結びついてできる同じく無数の有機的連関によって構成されている。それ故、個体維持のための凝集力と組織力がなくなれば、それら成素は他の成素との結びつきが断ち切れ、それぞればらばらに離散していく。そして遂には、一個体を成していた成素が無関係であったかのように散在してしまうのだ。

我々は組織が成員化された無数の個人で構成されていたことを確認したが、埴谷はよりラディカルにその個人ですら無数の成素からなる集合体であること、で構成要素とみえたもの自体が一つの組織体であることを暴いてしまう。そしてその基底にあるのは存在という誰の所有物でもない、非人称な領域であった。ここに組織と成員との関係が、個人と成素との関係に重なる道筋が用意される。

統合計画では、抽象的な指導者 位階制（と他の思考） 監視の内面化 秘密排除というように『死霊』内での組織展開を追ってみた訳だが、それらの手続きは簡単にいえば、ばらばらの個人を成員として如何に単一の方角に向けて統合させるか、の道程だと要約できる。このように考えてみた時に、同じく『死霊』で展開された埴谷存在論も同型的な問題を孕んでいるだろうと考えることは以上に述べてきた点から決して牽強附会なことではない。つまり、個人（個体存在）が無数の成素から構成されているとして、実はそれはもともとばらばらに散在していたものではないのか。そのばらばらのものをどのようにして、単一の個体として統合するのか。このような問題を、「われならざるわれ」の例でも明らかのように、埴谷組織論と地続きで考察することができる。以下、『死霊』に内在しているそれら問題群を組織論との交差を意識しながら考えていこう。便宜上、以下生物的な個体（生命体）から考察を始めていくが、最終的には再び生命なき基底的存在の次元に帰ってくることになる。基底的存在の次元はその時に再び取り上げることになる。

## 一、食のテーマ 抽象的な自己

の組織論では地方に散らばっているばらばらな個人を大量に動員し、成員化するのに役立ったのが紙のなかの指導者、密室のなかの指導者、抽象化した指導者だった。具体的にいえば、紙メディアと流通システムの使用が、一指導者の言葉のその空間的制約を解除させ、思考を見知らぬ者たちに伝播していく回路を用意した。その指導者は身体化されたオーラや物質的なシンボルをまとうことはできないかもしれないが、その主張のみが濾過され、個々人の内面に指導者権力を発揮することができるようになる。

ばらばらだった大量の個々人が抽象化した指導者によって、成員や成員予備軍となって組織拡大を準備していく。存在論レベルにおいても同様のことが起こっている。存在論レベルで組織の指導者に相当するのが「自己」という抽象体である。導入として埴谷の次のような言葉を引用してみたい。

「いかに殺生がいけないと言っても、殺しつづけてきた長い生物史の結果が人間なんです。そしてまた、子供のときから無数の生物を殺してきたのが成長した自分なんです。〔改行〕自己とは何ぞやと問うたら、死屍累々としていて、草や鳥や獣の死体で埋まっているのが自分なんです」(埴谷雄高+秋山駿対談「格闘する文学」/『海燕』平成三・六)

殆どの生物は食物連鎖のなかにある。蠅を蛙が食べ、蛙を蛇が食べ、蛇を鷲が食べ、鷲が死んでその死体から蛆が生まれ、そして蠅になっていく。この連続的なサイクルが通常食物連鎖と呼ばれるものだが、この連鎖の中で人間存在は極めて特殊な位置を占めている。というのも、技術を身につけた人間は極めて多様な生物を狩り食べるが、他の生物の餌として食べられることは殆どないからだ。こうして人間は地球上で最強の一方的な消費者となった。だから、個々人の自己意識の中身は、必然的に、「死屍累々としていて、草や鳥や獣の死体で埋まっている」。埴谷が主張しているのは、そのような無数の支援を受けて個々人が成立しているにも関わらず、「自己」という一種勝手な単位によって「死屍累々」の無数の異和を無視し、それを成素として統合してしまうことへの暴力性だ。同様の思想は『死霊』本文にも書き記されてある。取り合えず、誰がこの言葉を吐いたのかを記さずに引用しておこう。

「私」が「私」としてようやく出現すると、さて、その「私の生」の持続が、こんどは他の「生物殺し」によってのみしかおこない得ないのは、また、悲しく怖ろしい「私」の生と存在のかたちといわねばなりません。つまり、「この私の生」の持続は、魚、と、肉、と、野菜、をとりこむ絶えざる変幻的集塊の兇悪な持続にほかならず、つまり、「私」とは彼らの俯きつづけた死骸群の巨大の集積にほかなりませぬ、「この私」は絶えず「私ではない私」になりつづけてゆくことによってのみしか、「私自身」と、嘗ての嘗ても、いまのいまも、称することはできません」(『死霊』九章)

つまり、埴谷にとって自己とは抽象的なものに過ぎない。実質的具象的に自己を構成しているのは「魚、と、肉、と、野菜、をとりこむ絶えざる変幻的集塊」であり、「死骸群の巨大の集積」でしかない。それ故、「私」の成立には必ず「われならざるわれ」を想起させる「私ではない私」が入り込んでいる。しかしながら、自己という抽象体を仮構することによって、それら「死骸群」がもつそれぞれの異和や「私」からはみ出してしまうような齟齬は忘却され、自己の持続性や一貫性の下、統合されてしまう。いってみれば、自己という同一の方向性のもとで、異質な「死骸群」が成素として同定されるのだ。

この問題を象徴的に扱っているのは『死霊』内での食のテーマだ。「蛸」を噛みしめたことで食事をするをやめてしまった主人公三輪与志の挿話が一章で登場することは興味深いが、その問題を正面から取り組んだのが弾劾裁判と呼ばれる『死霊』七章で展開された夢の物語だ。

これは、瘋癲病院から誘拐された矢場徹吾が隠されている地下室に、誘拐を企てた張本人首猛夫が訪れた際、その枕元で首が寝て見た夢のなかの夢で語られた挿話だ。語り手は黙狂と呼ばれ、沈黙し続けてい

た男矢場で、遂に彼がその夢の中の夢で口を開く。舞台は「影の影の影の国」と呼ばれる場所で、そこでは「地上に嘗て発生した数十億年にもわたるあいだのすべての生、つまり、目に見えぬ小さな微生物から見上げるばかりに巨大な動植物のすべてを含むところの〔中略〕「すべてのすべての死」が僅か一つだけの異様不可思議な場所に押しあい、轟めきあい、重なりあって」おり、そこに「無限大」が宿っている。そこで行なわれる営みは「弾効」というただ一点のみで、その無数の元生物の幽霊は己を食べた生物を発見しては「見つけたぞ！」といて、「自己確認」の一方法して己を食ったものを弾効し、自分の所有権を主張する。始めに例示されるのは小蟹と鷗（シギ）だ。

「ほーら、見つけたぞ！」と影の影の影のすぐ近くの薄暗い奥で低く叫ぶ声にならぬ声が聞えたのは、四角ばった堅い甲羅の影のある小さな小さな空しく宙に開いた罅を振りあげた蟹の亡者からで、そこで見つけれられたのは、青い海辺の波打ちぎわの砂の小さな穴へ素早く逃げこもうとした小蟹を細長い嘴の先にさっと忽ちくわえた嘴ばかりでなく脚もまた長い水鳥の鷗の亡者だったのです。〔中略〕食われた亡者が食った亡者をついに見つけて弾効する この「影の影の影の国」の唯一の亡者たる自己確認のいわば一種悲しい極限の法則こそは、生きているものは生きているものしか弾効できないのだ、という嘗てのひたすら「自己肯定」のみに由来する多様多彩な戦闘と弾効方式をもった生の法則とまったく正反対なものです」（『死霊』七章）

この国では「見つけたぞ！」の合言葉によって、言葉なき筈の食われた幽霊が食った幽霊を摘発するありえない裁判が仮構される。一読して分る通り、弾効裁判の設定は、食の行動によって不当に成素を奪取し、自己を構成させる暴力性への批判的枠組みとして機能している。自己は、食によって成素の摂取と「死骸群」の忘却を周期的に繰返し、「自己肯定」だけが存続していく仕組みの中で抽象的に維持されるものではない。この設定は、忘却された「死骸群」が参加できないような、自己が自明視された「生の法則」を一旦括弧に括って、彼らに仮の言葉を与え、自己構成の暴力性を暴露させることに寄与している。しかしより興味深いのは次のみみずの弾効だ。

「見つけたぞ！ 俺の尻をまるごとしっかりと噛んで暗黒の地のなかへしゃにむに引いているのは、暗黒の国に閉じこめられてしまった永遠の流刑囚といったお前、つまり、目のないもぐらだが、それに対抗するようにまったく逆方向に俺の頭を懸命に引っばって地上の光明へ向って俺のをようやく半分ほど持ちあげているのは朝早くから夜の帳がおちるまで子供思いをつづけている母鷄で、いやあ、困ったことに、そのすぐ横に子供思いの母親がやがて与えてくれるに違いない俺の細長い幾節かを待ちに待っているちっちゃな雛が四羽も可愛い頭を寄せあって並んでいるんだよ。そして、俺はしっかりと堅く離さず噛まれた尻のはしと懸命に引きあげられている頭のはしのちょうど真んなかの胴あたりで殆ど同じ長さの二つに見事にひきちぎられてしまったが、そこで俺は、同時に見つけて暗黒の地獄へしゃにむにひきずりこもうとする目のないもぐらのお前と、雛思いの強い嘴をもって俺の頭の節目をひきちぎってでも光明の天国へ懸命にひきあげようとした母親鷄のお前の、どちらを、いったい先にまず弾効すべきか、同じ数の節目のまま真っ二つにひきちぎられてしまって、いいか、天国と地獄を思いがけず俺だけが共有してしまったこの俺としてはまったく迷わざるを得ないのだ」（『死霊』七章）

このみみずは、先の蟹と鷗の例と違って、もぐらと鷄とに同時に食われ、「二つに見事にひきちぎられてしまった」。こうしてみみずは天と地をそれぞれ共有する。これを言い換えれば、みみずは異なる二個体に摂取されることで、二つの領域に離散したのだ。それ故、弾効の対象は二つに分かれるのだが、その整理の仕方は厳密な言い方ではない。というのも、その鷄は「子供思いを続けている母鷄」であり、採取したみみずの半分は、その四羽の雛に与えられ、分かち合うように食されるだろうからだ。ここで弾効の対象は二つどころか、より細分化され、みみずはより一層「迷わざるをえない」。

しかし考えてみれば、そもそも、ある生物を摂取し、成素化したとしても、自然の食物連鎖のなかにあっ

ては、やがて、その成素も他の生物に譲り渡さなくてはならず、そのサイクルは原則永遠に続いていく。その点で彼ら幽霊が弾効を徹底化しようと目論むのであれば、弾効の対象を拡大していかなければならない。しかし食物連鎖のプロセスがサイクルを描いてしまうと、その対象は終着点(決定項)なく無際限に広がっていく。謂わば無限の「自己確認」であり、自己(の成素)はプロセスの進展に従って、時間的にも空間的にも境界線を喪失しながら、散在していく。

この連鎖のサイクルのなかでは、決して一方的で絶対的な罪を画定することはできない。というのも食うものは同時に食われるものであり、この相互性、平等性がサイクルを安定化し幽霊たちの弾効を中和化してしまうからだ。こうして「自己確認」のための遡行の手続きは最終的にサイクルそのものの確認へと帰着する。成素の離散と集合の力動がサイクルの具体内容であり、それぞれの個体がそのサイクルのなかの結節点でしかないからだ。みみずならずともあらゆる幽霊が「これはミジンコに食べられた藻の言葉だが」「いったいどんなふうに、食べられたものが食べたものを裁いていいか、その最終決定ともいべき区切り方がとてもとても難しいんだ」という困惑を抱くことになる。事実、一見生物殺しをしていないように見えるみみずでさえ、栄養素として摂取した落葉から弾効される。この避けがたい原罪を彼らは「生の罫」、「《食物連鎖》の狡猾絶妙な罫」と名付けている(註一)。

この取り留めのなさを回避する為に、幽霊達は取り敢えずの決定項、暫定的な最後の責任者を見出す。つまりそれが、前述したように多くの生物種を食いながらもそれに比べて食われることのない人間個体であり、その中で、代表として選ばれたのが道徳を説き聖人視されていたイエス・キリストと釈迦だ。キリストは焼き魚として食べたガリラヤ湖の魚に弾効され、また釈迦(サッカ)は噛み砕かれたチーナカ豆に弾効される。

しかし、ここでも魚と豆の弾効は生まれ出ることのなかった胎児の幽霊の登場によって、批判される。つまり代表の選択が恣意的であり、食を経験しなかった人間も存在していた。よって、弾効は人間全ての生に妥当しない、という訳だ。

こうして「自己確認」のための遡行の様相は大きく変化する。本文に即していえば「私とは何か」という「私」(自己)が自明視された問いの形態から、「何が私であるのか」という茫漠な問いの形態への完全な移行が要請される。そして、繰返しになるが、そこで見出されるのは具体的に成素の交換を駆動しつづけるサイクルでしかなく、それにも関わらず、或いはそのために却って、存続することになる「自己存在」の不思議さなのだ。

## 二、性のテーマ 現在至上主義と位階制

「支配者の心理も、〔被支配者が「無意志」と「自由意志」に引き裂かれているように〕つねに、二つの相反する矛盾に裂かれている。ひとたび発言すれば、その言葉が巨大なピラミッドの底辺まで服従と畏敬の裡に拡がってゆくさまを眺める一種残虐な快感と、見渡しがたい底辺の何処かに抵抗と反乱の声が起ってはせぬかという不安である。彼は不安につつまれば、なお威圧する声で話す。しかも、彼の不安は消えることもない。何故なら、支配者とはそれ自身だけでは、殆ど無だからである。彼は末広がりなピラミッドの底辺を自身の下に置くことによってやっとなりたっている一つの擬態に過ぎない。このような彼は、従って、ピラミッドの底辺を揺り動かさぬために、彼の手にし得るあらゆるものに爪をかけるのである」(「政治をめぐる断想」『近代文学』昭二六・二～三)

統合計画にも一部引用した文章だが、これはそのまま、埴谷存在論、つまり自己という指導者の抽象性とそれを支える成員化した「死骸群」(成素)の問題として読み替えることができるだろう。自己など「殆ど無」でしかない。しかし、それは無では決してなく、成素を自己の部分として認定し、自己維持の為に活用していく指導者だ。

しかしながら、成員の条件として組織内での「無意志」や「自由意志」を組み込むことを必要としたように、つまり成員を集合させただけでは組織とならないように、個体に宿る自己の構成においても成素が集合しただけでは十分でないことは容易に想像できる。組織に組織化の作用が必要だったように、個体にも個体組織化の作用が加わらねばならない。

組織論レヴェルの場合その組織化方法の具体例は位階制と他人の思考のセットだった訳だが、同じように存在論レヴェルの位階制というものを考えることができる。三輪兄弟の父三輪広志が津田康造の妻で安寿子の母である津田夫人に、「自己主張……この言葉は貴方にどう響きます? 〔中略〕その脂肪のひとつかけの塊りや鼻脇に浮かんだ一滴の汗すらがそれぞれ自己主張をするなんて考えてみたこともないでしょうからね」(『死霊』一章)と挑発している場面があるが、そこで描かれた「脂肪」は個人を構成する下位成素であり、個人の余剰分であって、脳や心臓と違って、それを欠いても個人は何の問題もなく存続し続けられる。このように同じ成素だからといって、すべて平等であることはない。

しかしながら存在論レヴェルの位階制は、成素の内的編成以前に、本質的な力を行使しているといえる。例えば我々は統合計画の第二章で、埴谷の基本的政治観、位階制と他人の思考の問題を考えたが、そこで附随していた現在至上主義は文脈の関係上無視していた。今一度引用すれば、「政治を政治たらしめている基本的な支柱は、第一に階級対立、第二に絶えざる現在との関係、第三に自身の知らない他のことのみに関心をもち熱烈に論ずる態度である」(「政治のなかの死」)。ここでは「絶えざる現在との関係」を考えてみるのが便宜だ。

「政治は、つねに、現在にかかわる。昨日、何を説いたにせよ、その事柄の責任をもはや今日はもたない。何故なら、昨日は今日でないから。政治の論理がつねに現在をめぐる展開するのは、権力が抽象的、普遍的なものと無縁だからである。政治の現実、与えられた瞬間に、誰が誰を同盟軍として選んでいるかにあり、その同盟軍の変化によって、昨日採りあげたものも今日捨てられてしまう」(「政治をめぐる断想」)

ここでいわれている「抽象的」とは現在時を括弧がけできる理論的の謂いに等しく、指導者や自己の抽象性を考える上では紛らわしいが、別物である。ここでいわれていることは、歴史の問題を例にとると分かり易い。革命組織も含めた、政治組織は無論、無数の成員の協力によって維持される訳だが、歴史に名を残すことができる記名的な成員はごく少数でしかない(例えば、レーニンやスターリン)。位階制は成員の実際的編成にも関与するが、その一方時間的方向においてもその力を発揮し、記名的なものとなつて無名的なもの



とを振り分ける。

ここで指摘した政治の現在至上主義は三輪高志は自身の制作したリーフレット『自分だけで行なう革命』の解釈を巡り、「他から動かされる精神をきびしく弾劾した『あれ』をほんとうに最後まで読んだのかな」と言って密告者の男に施した注意と連関している。

「あらゆる真の革命家は《瞬間だけ》の革命家にしかなれないのだ。〔中略〕その《瞬間だけ》をひとたびとり去ってしまえば、彼は生活のなかの素朴な無名者にほかならない。そして、いいかな、これだけは憶えておくがいい。あらゆる真の革命家はその《瞬間だけ》の革命者としてではなく、つねに、単なる弥次馬。或いはまた兇暴な犯罪者、さらには几帳面な律義者としてやがて革命から振りおとされてしまうのが革命の歴史の鉄則だ。いいかな、革命はその《瞬間だけ》の革命家の数限りない無名者の影と影と影の不思議な集合によってのみ支えられ、そして『革命家』と呼ばれる似而非革命家達の手を手渡されることによって革命の抜殻として完結し、あらゆる革命の歴史はこの種の『革命家』の手に篡奪されることによってまさに歴史的な歴史となるのだ」(『死霊』五章)

高志にとって、真の革命家は持続することなく、戴冠なしに消えていく。しかもその性格付けは瞬間的な「革命家」でさえなく、「弥次馬」や「犯罪者」、「律義者」といった雑駁な無名の存在者として処理され、代わりに「似而非革命家達」が榮譽を受ける。ここに「篡奪」があり、それが「革命の歴史の鉄則」なのだ。整理していえば、革命とは名もなき革命者達が各々独自に行なった瞬間的な努力や行為が、「数限りない無名者の影と影と影の不思議な集合」となって成就するものであるのだが、その無際限な力は所謂「歴史」に登記されることなく、無に等しいものとして処理されてしまうのだ。

「数限りない無名者の影と影と影の不思議な集合」が例えば「影の影の影の国」の舞台設定へ繋がっていくことは明らかであるが、埴谷存在論の位階制と現在至上主義のセットは、出現した現在時の個体存在の成素の内的編成よりも、個体の出現の条件そのもの(個体の起源)に強く関与している。つまり、存在論レベルの位階制は成素と選択を行い、それは同時に非成素を無に等しいものとしてその可能性を処理していくのだ。それを確認するには、食と並んで、『死霊』が直接的、間接的に延々と扱っている性のテーマを確認することが必要だ。

性のテーマは食のテーマと共に埴谷が特に後期になって顕著に批判し続けたテーマだ。実際、埴谷の実人生においても、彼は妻敏子が懐妊しても墮胎を繰り返させ、決して子供を作ることをしなかった。その根本的な理由は性が食と同等の原罪で、それは子宮のなかで競走する精子の群れが、たった一匹しか選ばれず、その生き残った一匹は結果的に必然的に「兄弟殺し」の罪を負っているからだ。

先に言及した弾劾裁判での産まれずに死んだ胎児は「子供づくり」こそ、生そのもののなかのまぎれもない「原罪」だと思ふよ」と、食よりも性こそを原罪として認めるべきだと主張している。この胎児は「死のなかの生」とも呼ばれ、飢えて死のうとしていた男と女が性交してできた子供だった。彼はその不条理を訴えている。その胎児は母親が餓死したために産まれることなく死んでしまったのだった。ただ、そこに現われた正体不明の「淡い影」から胎児は半分肯定されながら、半分否定される。

「おお、いいかな、胎児よ、そのお前がようやくそのお前自身としてそこにあるのは、四、五億もにのぼるお前自身の兄弟殺しの凄まじい結果の上になりたっているのだ。よく考えてみる。お前が目に見えぬマラソン競走のゴールである母親の胎内の弾力に充ちみちた壁の傍らの卵子に最初に辿りついたとき、お前のすぐ横には四、五億の兄弟達が尽きせぬ盲目の祝祭のごとくに犇きあっていたのだ、いいかな、お前のお前自身の自己確立こそ、お前のまぎれもない兄弟である四、五億の可能性の胎児達に対する一斉の大殺戮の開始にほかならなかったのだ」(『死霊』七章)

この後、「全水中における全魚類の卵の総集合」も登場し、無数の卵の中で二匹程しか「魚」にならないことを問題視しているが、このように『死霊』は現在時において出現しなかったものたちの声を仮構するこ

とで、個体の出現そのものの位階制を暴き、その暴力性を抉り出そうとしている。埴谷の思想にとって、存在しているものは全て罪を負っている。そして現時は政治の場合と同じように個体からそれら無数の死に絶えた過去の無名なものを忘却させてしまう。食われたもの、生まれなかったものの声を仮構し、現在生きている者を批判しようとする試みは『死霊』という小説の特徴的な側面である。

『死霊』七章に先立って、五章ではもう既にこのことが問題にされていた。つまり三輪与志の兄三輪高志は、スパイ殺人事件の後、スパイを殺した実行犯で組織の監視下に置かれていた一角犀と自身の恋人節子が「心中」するという事件に遭遇する。そして検挙された高志は獄中で三体の幽霊を見ることになる。二体は勿論、一角犀と自身の恋人節子であるが、残りの一体は夢魔という悪魔で「三輪高志の想像、ないし妄想のなかに生きる架空の住人」(註二)とも言われているこの悪魔は存在の窮極の秘密を語りながら、「未出現宇宙」のことを示唆している。

「せいっぱい振舞えば、無限の無限倍ほどくらいにはなってみせるその出現宇宙とても、いいかな、その目覚めかけた頭を擡げようとして如何なる理由でかついに擡げず、或いはすでに目覚めきったそのはじめから言い知れぬ不快の裡でそれを自ら拒絶しているのかもしれない未出現宇宙のぼんやりかかえこんでいる幅も知れぬ幅の鉄色の海 目にもとまらぬほどの永劫の緩慢さでうねっている無気味な鉄色の海の幅も知れぬ幅のなかに置けば、さて、そのどろりとした鉄色の海の真ただなかに一つの意味もない浮標のように揺れ動いている小さな孤独なコルク玉こそ、相ついで継起しながらつねにお前達にうまく馴れ親しんでしまったこの出現宇宙の総体のかたちにほかならぬのだ」(『死霊』五章)

「出現宇宙」とは「未出現宇宙」の対義語で、実際に現実化した宇宙のことを指す。しかし、その外部には選択されなかった可能性としての宇宙が事後的に考えられる。これが「未出現宇宙」だ。そのため必然的に「未出現宇宙」は「出現宇宙」よりも限定(現実化)されていない分広大となる。文学的に表現するならば、「未出現宇宙」の犠牲によって「出現宇宙」は出現する。

恰も高志が語った「似而非革命家」のように、歴史の表舞台で認められるのは「出現宇宙」という現在存在である。しかし、その底には「数限りない無名者の影と影と影の不思議な集合」に等しい存在とさえ認められない「未出現宇宙」という可能性の犠牲がある。これがこの場面より少し後で夢魔が言う処の「この出現からあの未出現にまでわたる《全》宇宙の永劫の鉄の法則」なのだ。こうして、無数の無名革命者を強靱に組織していた位階制の政治問題が、出現宇宙と未出現宇宙という宇宙存在論的位階制の問題として編成される。現時にある宇宙の存在は、あったかもしれなかった宇宙の犠牲の上に成立している。これを具体的に明示する例が性のテーマなのだ。

しかしながら、「未出現宇宙」の設定を介さずとも、『死霊』はより具体的に性のテーマに取り組んでいるともいえる。食が食うものと食われるものとの分割と統合の行為であるとしたら、性もまたは統合(精子から卵子への受精)を介してなされる、産むものと産まれるものとの分割の行為であるといえる。それ故その延長線上で、例えばここから『死霊』の親子というテーマが派生してくる。

『死霊』では二組の親子が主に登場し、ドラマを進展させていく。三輪広志から生まれた三輪四兄弟と津田康造とその夫人から生まれた津田安寿子だ。この二組は様々な点で対照をなしている。男の子と女の子、複数の子(兄弟)と単数の子(一人っ子)、放任家庭と厳格家庭等等。しかし加えて、この対照的關係は三輪四兄弟において更に下位分解することができる。つまり三輪広志の子供、三輪四兄弟とは、高志、与志、首猛夫、矢場徹吾の四人を指すが、このうち高志と与志の二人は三輪夫人との正統な子、嫡子であり、首と矢場は広志が妾との関係の中で生まれた私生児である。しばしば、首猛夫は与志に対して、敵対的態度をとっているが、それはこのことと強く関係しているように思われる。事実、首猛夫が次のようにいう。「途方もなく厚かましいのはここにいるこの僕ではなく、僕たち四人の親父、つまり、三輪広志氏そのものだというふうに言い直して下さい。何しろ、まぎれもない直系の三輪も与志君もこの世がいったい何処に

あるのやら関りもなくのんびりと、窮極の存在とやら、或いは自分自身のなかで果てしもなく足踏みしている単細胞とやらに思いふけっているとき、いいですか、正妻以外の（哀れな女達）の子である矢場もこの僕もこの世のありとあらゆる極端酷薄な屈辱と苦難のなかで、この世の並の少年らしい「純粹素直」な気持など一度ももたずに、生れおちて以来、日毎、夜毎、育てゆかねばならなかったのですからね！」（『死霊』七章）

同じ兄弟であるにも関わらず、一方は嫡子として立派な保育と教育の環境の中で育てられ、他方は私生児という理由で「屈辱と苦難のなかで」育てられた。首はこの不平等性で三輪広志や与志を弾劾する訳だが、ここには存在論レベルの位階制が擬似的に再現されている。つまり、やっと実現した兄弟であっても、それが正統なもの（直系）なのか異端なもの（傍系）なのかの社会的基準によって、位階的な順位が設けられ、その高低に従って充実な保育環境と社会的ステータスが分配される。首猛夫の不服はここにある。

或いは、性は食とは別に自己の自明性を危くさせるという問題もここで示唆されている。というのも、性はその起源が、己に先立つ精子と卵子との結合という必然性のない物質的接触であることを明らかにしてしまうからだ。加えて、精子や卵子が他の自己の所有物、自己の延長であるのだとしたら、それはその自己の独立性を揺らがす。つまり、独立していたようにみえた自己は、実の処、ある別の自己によって産まされ、支配された擬似的な自己、別の自己が散在した成素かもしれないのだ。

例えば、三輪高志はその恋人との付き合いの中で、子供を作することを拒否する。与志との対話の中で自殺と共に子作りの拒否だけが、「自由意志」を発揮できる希少な行動だと語る高志にとって、子作りは自己の延長、自己の分身、自己の複製を増やすことにしかならない。そして自己の複製は必ずやオリジナルとコピーという位階的支配被支配の関係を生んでしまう。「自分だけで行なう革命」を目指す高志はこのことを熟知していた。高志が警戒していたような思想は典型的に、娘安寿子とフィアンセである与志の行動を心配する津田夫人の次のような言葉に表れている。

「この私は、まぎれもなく安寿子の母親で　　そう、勿論、ゆきとどこかぬところもある無智な母豚かも知れませんが、それにしても、誰がなんといおうとあの子の将来を真心から気づかっている唯一の親なんですわ。ええ、そうですとも」（『死霊』二章）

「安寿子にはこの私の……一部が伝わっていて　　それこそ疑うべからざる事実ですわ。そうです。それこそ、夫に誓って好いことなんです！」（『死霊』二章）

自身の分身としての娘。津田夫人にとって、この事実が娘への介入の根拠を担保している。しかし例えば高志からみれば、母と娘という関係において指導者と成員とに近似した位階制が準備されていると考えられる。孤独な革命家高志にとって　　或いは赤ん坊を泣き止ますことを頑なに禁じていた与志にとっても　　、親の愛情による介助さえ、支配被支配、指導者と成員に等しい擬似的な位階的關係を作り出してしまふ許されざる行為なのだ。

しかし、考えてみれば、自己の複製として介入や介助が正当化できるのだとしても、その介入はどの時点で停止すればいいのだろうか。弾劾裁判がそうであったように、その自己確認の旅は生殖が続く限り永遠に終ることはない。食にサイクルがあったように、性にもサイクルが存在する。そして、どちらも過去でも未来でも成素の集合と離散を繰り返しながら、自己の成素を散在させていく。しかし、その時、自己はどこで終るのだろうか。どこまでが自己の権限の管轄に入り、どこから他者が始まるのか。こうして津田夫人の子供の所有権の主張は、自分の息子たちを「食客」だと言い切り、その無関心さを突き通す三輪広志に次のように反論される。

「そうなると、貴方がきっぱり主張される所有権は甚だ微弱に　　しかも条件つきになったものだ。僕は敢えてお伺いするが、貴方はいったい津田ときっかり半分ずつその所有権を主張なさるつもりでしょうか。勿論、そうだとすると、貴方自身の一部である主張する分泌物　　まあ例えば興奮したときの鼻脇に浮び出

てくる一滴の汗といったものについて、貴方は何処まで貴方の権利を主張しつづけます？」(『死霊』二章)  
弾劾裁判で問題になった「最終決定ともいうべき区切り方」が、性のテーマでも浮上しているのが分かる。つまり、その共通の問題性は、成素の散在は自己の延長と見做すべきなのか、それとも自己の解体なのか。そして、延長だったとしてもその管轄の権限はどこまで自己に認められるのかということだ。

### 三、『死霊』細胞論 起源としての分裂

整理しよう。成素の集合は個体に抽象的な自己を準備するが、抽象的な自己が成立した瞬間、その順序が転倒するように、恰も成素が自己のしもべであるかのように自己が強権化される。そして、具体的な成素を支配しつつ交代させながらも実質空虚な自己が持続していく。ここには代表的に二つの暴力の介入を考えることができる。第一は自己と共にある食のテーマで、主に捕食行動と排泄によりその成素交代が維持される。そして第二に、それとは別に個体成立のための成素の集合（受精卵）にも暴力は介在している。つまり自己に先立つ性のテーマで、現在時を獲得する出現した個体の誕生は同時に、未出現の精子の群の犠牲の上で成り立っている。

しかし、この時自己を構成する成素はやはり二つの側面から、散在していく。第一に、食う個体が同時に食われる個体でもあり、それが連鎖していくこと（人間個体の場合は主に土に還っていくこと）。第二に、産まれた個体は同時に産む個体でもあり、生殖活動によって構成される自己の延長に等しい子供という個体の産出とその連鎖。この散在状況のなかで、抽象的な自己の権限は何処迄設けられるのか。この問いが弾劾裁判や『死霊』の親子問題において課せられ、それへの解答が極めて難しいことを我々は確認した。

この論理展開を物語的に要約したのが『死霊』のなかで語られた細胞論であり、加えてその細胞論は食と性の連鎖の起源を語っている。

それを確認する前に「細胞」の語彙は、戦前のプロレタリア思想にとっては特別な意味合いをもつことに注意しておいてもいいだろう。つまり、それは各地方に点在する共産党の基礎組織体の俗称であり、或いはまた、コミンテルンに従う各国の共産党支部を意味している。即ち、「細胞」とはオーガニゼーション（組織＝有機体）の権力の中心（中央）の代わりに、各地方へ派遣的に散在しながら、その場その場で運動していく、伝達体であり末端部分なのだ。との連関でいえば、『死霊』での革命組織の成員は広範囲に散在していたが、彼らがそれぞれの地方で結成した小集団が「細胞」となると考えていい。しかし、その小集団に固有の自律性は認められておらず、個々の成員の場合と同様、位階的な秩序に従わねばならない。

この比喻関係を確認した上で、しかし政治の革命以上を望む『死霊』にとって、「細胞」はその比喻的意味合いを越えて純粋な生物学上の単位としての細胞へ直面しなくてはならなくなることは自明だ。「人生の最大の不幸は？」というアンケートに埴谷は「群棲しているのに単独者であること 或いはその逆」と答えているが（『文芸』昭三八・一〇）その不満は端的に細胞という生体の基礎単位そのものへの疑問へと容易に転化する。というのも、 比喻的であれ何であれ 単細胞を例外として多くの細胞はそれ自体で独立して存在することはなく、隣接する他の細胞との連関のなかでその位置を占め、更には、全体、即ちオーガニゼーションそのものの構成と維持のためにのみ存在しているからだ。友人である黒川健吉に三輪与志は「まったく孤独に考える単細胞」（六章）にたとえられているのは、他者との連帯を拒否する男であるからに他ならない。

弾劾裁判の続きを考えていこう。産まれてこなかった胎児や魚の卵、小さな粟粒等が登場し、最後には「原始の単細胞」の声が響き渡る。それは自身を「自存存在者」の種族だと規定しており、生命の始まりにおいて空間的限定を欠いて無限に広がっていく「虚膜細胞」なのだと言っている。

「あっは、理解できるかな、個と他と全体、自己存在と他存在と全存在の融合をすでに遠く実現してしまったこの俺が！ ぷふい、貪食細胞の忌まわしい出現のずっとずっとずっと前に深い深い深い真っ暗な闇の地底にだけ住んでいた俺は、これまでの全生物のすべてに知られていないので、この俺自身がその俺自身をあえて命名してみれば、ほら、聞いているかな、虚膜細胞とでもよぶべきものなのだ」（『死霊』七章）

虚膜細胞の膜は「透過」可能なもので、あらゆる無機物を自身の内に内包できるがために、その単細胞

は「全存在」、宇宙そのものと等しくなっていく。しかし、その後、数十億年を経て「貪食細胞」が出現し、「食うもの」と「食われるもの」との分裂が生まれてしまう。この意味で、虚膜細胞は先行していた弾劾者や被弾劾者からは超越している。というも、彼らは「貪食細胞」の系列に属し、虚膜細胞は彼らにとっての「先住者」であり「生の罫」にはまることはなかったからだ。虚膜細胞は無辜で、罪の元凶は貪食細胞の出現にある。

貪食細胞の出現、この延長で生殖細胞が生まれてくる。

「食うもの」と「食われるもの」との分裂がそこにはじまったばかりでなく、やがてさらにその怖るべき滑稽なつづきとして、より困ったことに、雄と雌との性の分裂もそこにひきつづいてもたらされると、許しがたい悪の上に、またも許しがたい悪が二重に積みあげられて、「より多く」食って食って食いつくす思いもよらぬほど多様で巨大な幅が拡げに拡げられることになってしまったのだ」(『死霊』七章)

貪食細胞は生殖という契機を媒介にして更なる貪食的傾向をもつことになる。貪食的傾向が最高度となったのが雑食的人間であった訳だが、前章前々章で確認した通り、食も性もそれぞれ実質的にサイクルを伴っていたが、ここで明らかになるのは、そもそも食と性も独立したサイクルである以前に、その性と食という形式そのものが相互干渉的な連鎖反応によってサイクルを描きつつ多様化しているという事実だ。言い方を換えれば、性的な契機によって貪食な個体は更に多様な食の傾向をもつ子孫を産み、それが繰り返されることで次第に個体のバリエーションが富んでいくということだ。

しかしながら、どうして貪食細胞が誕生してきたのだろうか。貪食細胞が存在しなければ、そもそも弾劾裁判も行なう必要がなくなる。この過誤は如何なる理由に由来しているのか。

この細胞論は津田安寿子の誕生日パーティーが描かれる九章での首猛夫による説明によって語り直されることになり、それを参照すると一応の答えはそこで提出されている。

「全存在のなかのはじめのはじめの「孤独に考える単細胞」などと比較にならぬほど極度に愚劣の果てのつぎの出現なるものは、いいですか、安寿子さん、孤独に考えることなど不意とやめて、二つに、そして四つに、さらにまた八つに、とつぎつぎに分裂した単細胞が、そのあたりの薄暗い何処かで、「互いに触れあったとき」！ ぷふい、いいですか、安寿子さん、よく覚えておいて下さい、ここでこの上なく重要なことは、「互いに触れあう」というそのただの一点にこそあるんですよ、そして、その「互いに触れあったとき」、いったい何が起ったのだろうか！ あっは、そのとき、一方は他方を、安寿子さん、いいですか、ほら、「食って」しまったのんです！ これが「互いに触れあう」ことの怖ろしいはじめのはじめの接触ぶりで、つまり、貪食細胞の出現だ！〔中略〕出現した「貪食細胞」が、或るとき、何処かで、「互いに触れあいつづけているとき」、おおどうしてだろう、こんどは、一方が他方を食わずに、その二つが、ともに、仲よく、「接合」してしまったのだ！〔中略〕これこそ、この全宇宙はじまって以来、最高最大を越える最窮極、もはや行く先もない、どんづまりの果ての愚劣の饗宴である生殖細胞のほかならぬ出現だ！」(『死霊』九章)

弾劾裁判では何の条件もなしに貪食細胞誕生が語られていたが、首猛夫の説明では、虚膜細胞自体の細胞分裂が貪食細胞誕生の前提とされている。そして、複数の元虚膜細胞が接触し、そこで、一方が他方を摂取すればそれは「貪食細胞」であり、両方が接合すれば、それは「生殖細胞」となる。このように『死霊』後半部の細胞論では、性と食という原罪を構成する原罪の原罪が、細胞「分裂」であることが示唆されている。

ちなみに、『死霊』には、実は虚膜細胞(「はじめのはじめのはじめの単細胞」)が登場人物として参加している。それは黒服という男で本稿一章で、「変幻的集塊の兇悪な持続」「死骸群の巨大の集積」について語ったのが、この黒服である。彼は「すべての以前の以前」という謎の男青服と行動を共にしており、主に九章の安寿子の誕生日パーティーで活躍するのだが、二章でも安寿子の祖父津田亮作と墓地で会話をしている。

しかし、貪食細胞誕生が細胞分裂に起因にしていることを理解しても、今度は何故始原の単細胞が分裂するのかという問いが残ってしまう。黒川が与志のことを「単細胞」に例えていることは前述したが、彼は

更に「あらゆる細胞分裂は「外界」から何かを盲目的にとりいれ、これまでの存在以外の何ものにもなり得ぬことによって、むしろ自分自身を侮辱しているのです。三輪は、そうした種類の「自己増殖」を拒否しているのです」と説明している。しかし何故、「孤独な単細胞」は「外界」を取り込もうとしたのか。この点について、『死霊』は具体的な説明を施していない。しかし、答えを出す手段が皆無な訳ではない。つまり推測的な解答を考えることはできる。それが次に問題にする埴谷思想の鍵語「自同律の不快」である。

## 四、「自同律の不快」の両義性

一個人に宿る抽象的な自己は食と性の相互干渉的サイクルのなかで、偶然的に生まれてきたものに過ぎない。そして『死霊』の細胞論に従えば、その「自己確認」の遡行の先には細胞「分裂」という原罪（性と食）を形作る原罪があった。

何故「分裂」が起こってしまったのか。この章から、食と性に縛られた個体存在の条件に対して、どのような反抗や変革がありうるのか、埴谷の用語でいえば「存在の革命」の一端を考えていきたいが、細胞「分裂」の謎を解くためにも、ここで、先ず第一に重要になってくるのが、埴谷思想最重要の鍵語とっていい「自同律の不快」だ。「自同律の不快」とは何か。よく引用される『死霊』の主人公三輪与志の経験の場面から引こう。

「《俺は 》と呟きはじめた彼〔三輪与志〕は、《 俺である》と呟きつづけることがどうしても出来なかったのである。敢えてそう呟くことが名状しがたい不快なのであった。〔中略〕主辞と賓辞の間に跨ぎ越せぬほどの怖ろしい不快の深淵が亀裂を拡げていて、その不快の感覚は少年期に彼を襲ってきた異常な気配への怯えに似ていた」（『死霊』二章）

今日多くは同一律と呼ばれる、「自同律」とは論理学上の用語で、それは  $A$  は  $A$  である という命題で表現され、排中律  $A$  は非  $A$  ではない や矛盾律  $A$  は  $A$  であると同時に非  $A$  であることはできない という命題と関連している。引用文中の「主辞」（主語）とは前者の  $A$  を指しており、「賓辞」（述語）は後者の  $A$  を指すこととなる。通常、前者の  $A$  と後者の  $A$  はイコールという論理学的手続きで結ばれ、間隙や差異の存在しない完璧な一致が表現される。しかし埴谷はそこに感性的感覚的な「不快」を読み取るのだ。

何故「不快」なのか。森川達也は「自同律の不快」を意識の形式の問題として、つまり サルトルならば対自存在と呼ぶだろう 意識するものと意識されるものとの絶対的な分離、主客の埋めがたい溝という哲学的問題の文脈で考えている（註三）。これは前期埴谷を考える中では正しい。しかし、埴谷雄高の不変神話を批判した鹿島徹が指摘しているように（註四）、「自同律の不快」というタームは長い制作期間を経て構築されていった『死霊』本編と埴谷自身の思考のなかで微妙な変化を被ってしまう。初期アフォリズム集『不合理ゆえに吾信ず』から分析を開始した鹿島の詳細な埴谷存在論の研究成果が参考になるが、その過度な使用例は次のような埴谷の発言でもみることができる。

「時間と空間の両方の無限を魂の傍らに持って、その中に置かれたものとしての私、これは必ずしもこの僕でなくてもいいんです。コップでも何でもいい。僕は偶然いまここに生まれたから、埴谷雄高という名前をつけられて、埴谷雄高と自分でも思っている。そういう存在論的な私を大観すると、僕の自同律の不快は、ただに、生だけでなく、存在へも、宇宙へも適用される。あらゆる宇宙の事物も宇宙自体もその自分でありたくなくて、変転するというのが僕の考え方です」（小田切秀雄＋高橋敏夫＋埴谷雄高座談「証言・昭和という時代」『すばる』昭六三・五）

主語と述語を一致させてしまうことへの戸惑い、安定的な帰属に留まらない「私」の余剰性、齟齬する意識と対象、それらの不一致の感覚を感性的に表現していた「自同律の不快」という用語は、後期に至って拡大解釈的に（生体物体を問わず）個体の変転という大きな役割を担わされることになる。埴谷は他の場所で長期間観察していた砂粒が二つに「分裂」する事象を何度か取り上げ、やはり「自同律の不快」の説明として用いている（註五）。ここには明らかな飛躍がある。しかしながら勿論、この飛躍は決して理解できないものではない。他のようでもありえた述語の可能性に「私」（主語）が曝されているのだとすれば、「不快」の先にあるのは「変転」であるからだ。こうして、「自同律の不快」は抽象的な自己を頂点にした存在論レヴェルの位階制への違和感を表明することにもなる。自己は無数の「死骸群」から成っている。そこ



で同一律は無能であり、自己は成素の混成から構成されるものに過ぎず、また散在していく定めの中かで一時的に生起してしている限定的なものに過ぎない。序の言葉でいえばどのような「われ」にも「われならざるわれ」がとり憑いている。「自同律の不快」はそれを無視する自己に対し異議申し立てをするのだ。

しかし序でみたように人称的な個人は「死骸群」以上に非人称的な存在を基底にしていた。与志は、個体として同定されない存在、無限定で取り留めのない非人称な存在を「気配」として象徴的に察知している。「彼はもはや名状しがたい一種の夜のざわめきのなかにあった。それは単なる孤独ではなかった。彼とともに移動する謂わば一つの空間が、彼とともにあったのである。しかも、一つの墓石から他の墓石へ、一つの家から他の家の連なりへ、彼を凝視めつづけながら私語する囁きは伝わりつづけたばかりではなかった。墓石の背後の晦暗へ、さらにその闇の内部も見渡しがたい遥かな地平へ、その地平の上へ重たげに垂れ罩めた厚い鉛ののような層へ、そして夜目にも白々と流れるちぎれ雲へ、蒼穹にまたたく星辰へ　つまり、涯もない無限の空間へ、低くかぼそい囁きは囁きを呼び、忍び笑いするようなざわめきはざわめきを伝えて、拡がりつづけると思われた。このような無限の拡大感覚は、或いは逆にこんなふうにもいえた。それは、彼自身の無限の縮小感覚なのであった。囁きと忍び笑いとざわめきに取りかこまれて、涯もなくつらなれた白けた道を進んでいく彼は、一つの巨大な、その底部も見透かしがたい漏斗のなかへ降りてゆくような気がした」(『死霊』一章)

これは序で言及した死者の意識がさらに分解した、取り留めのない非人称な存在の描写と非常によく似ている。改めて首猛夫の解説から引用しよう。

「そこにまず最初に聞えるのは、闇の遠くから伝わってくる暗い森のざわめきのようないわば《存在のざわめき》の遠い通信の入り組んだ混線のような、つまり、いいかな、木の実のはじける音や、枝と枝の擦れあう軋みや、根の這う緩ゆっくりした動きなどの無数の大きな、また、かぼそい音響が同時に重なりあってはじめは何の音とも解らぬ遠い暗い森のざわめきのような、抑えに抑えきれず湧き起りながら寄せてはまたひき返してゆく海辺の波とたえざる砂の転がりのような、広い大気のなかを気ぜわしげに飛びかっている無数の目に見えぬ微粒が絶えず互いに打ちあってははじけとぶ小さな小さな放電をつづけているような、微かに微かに響いてくる、無気味なほどゆっくりした、しかも、無限という網でなければとうていとらえきれぬような巨大な幅をもった複合音で、敢えて永遠を主宰する神の言葉でいえば、それは往きつ戻りつする何かそこに存りつづけることだけにひたすら執着している永劫の肯定音にほかならなかったのだ。あは、つまり、宇宙全体が《私語する無数のざわめき》をはらんだ一つの潮汐運動にほかならないということこそ、永劫の神のなかにそれまで長く伝えられてきた単一の運動だったのだ」(『死霊』五章)

重要な点が二点ある。第一に確固とした客体の像として結ばれないような漠たる存在の無名の「名状しがたい」「気配」がここで記されている。語り手のように与志は「孤独」ではない。対象化できない存在の「私語する囁き」「ざわめき」が連鎖して、彼を果てなく包囲している。「底部も見透かしがたい漏斗のなかへ降りてゆくような気」は、指導者が感じるであろう「見渡しがたい底辺の何処かに抵抗と反乱の声が起ってはせぬかという不安」(「政治をめぐる断想」)と決して無関係ではないだろうが、ここでは結節点にしか過ぎない一個体が露骨に描かれている。

そして、第二に、個体を取り巻く取り留めない「気配」は静的なものではなく、「囁き」が「囁き」を産み「ざわめき」は「ざわめき」を産むように、力動的な連鎖運動と不可分なものとしてある。食でも性でもこのような連鎖運動を確認したが、そもそも生命の宿らない物質存在においても例外なしに『死霊』はこのような連鎖運動を認める。これは「自同律の不快」に生命体や物といったレベルを設けなかったことの遠因となっていると考えられるが、何れにせよ「自同律の不快」は自己の権力性を相対化してしまうような「気配」への察知へと行き着く。『死霊』冒頭付近から「自同律の不快」を訴えていた三輪与志がこのような「気配」を察知し、しかも彼が仲間から「気配」と綽名されていたことを考えれば、強権化された自己を相

対化し、存在論レベルの位階制から脱却する試み、「存在の革命」の一端は『死霊』一章から既に準備段階に入っていたといっている。

しかしながら「自同律の不快」が「変転」の原動力なのだとしたら、それはどのようにして「変幻的集塊」と区別されるのだろうか。或いはそれが区別されるのだとしても、正しくその「不快」によって虚膜細胞は「外界」を取り込み、「分裂」したのではないだろうか。前章で謎めいていた虚膜細胞の細胞「分裂」は、純粹な「自存存在者」である始原の単細胞が「自同律の不快」に推されて、小さな砂粒のように「分裂」したのだと考えれば説明がつくが、しかし、それは「自同律の不快」こそ貪食細胞と生殖細胞とを産む原罪の原罪、「自己増殖」の罪であったということをも同時に明かしてしまう。

だからこそ「自同律の不快」という現象への評価は二重化され、それこそ「分裂」されざるをえないようにみえる。第一に「自分でありたくなくて、変転する」「自同律の不快」の力は、「変転」による自己からの脱出をもたらすが、それによって自己の権力性は死に絶えるかといえばそうではなく、第二にそれは同時に「変幻」によって成素を入れ替え、そして様々な自己の延長へと散在することによる自己持続であり、接触の二形式、摂取（食）と接合（性）の可能性を切り拓いてしまう原罪の条件でもある。これは「自同律の不快」の不可分な両面のように思える。

結局の処、種々の連鎖運動のなかで抽象化された自己の権限はどこまで有効なのか、という問題に舞い戻ってきてしまう。「自同律の不快」はその権力性に異議を申し立てることはできるものの、直接的な解決をもたらさず、寧ろ結果的には自己延命を補助してしまうようにみえる。

## 五、埴谷雄高の存在論 「存在の窮極の三つの鍵」

『死霊』五章で未出現宇宙を語っていた夢魔は存在の窮極の秘密が三つあると語っていた。この三点は本稿で考察してきた埴谷存在論を要約しているように思われる。

第一は「終りからは始められぬ」だ。

「おお、存在のなかの俺たちはひたすらそのはじめからはじめてついにやがてそのおわりにまで辿りゆかねばならない。いまだ何物も終りから立ち上ってその原始の未動の場にまで遡り得たものはない」(『死霊』五章)

あらゆる個体は生物であれ物質であれ、成素の離散と集合のダイナミズムのなかで成立しており、終わりから始めることはできない。個体を、そしてそこに宿る自己を構成するためには、成素を取得するための土台が必須となる。その観点からみれば一個体はその結節点でしかない。言い方を換えれば、ある現在時において出現した一個体には必ず、忘却された過去がとり憑いており、特に人間個体の場合、食と性の原罪としてそれは表象される。

そしてこれは位階制の問題でもある。第二は「巨大な無関係」だ。

「街へでたお前が目も交わしあうこともなく絶えずすれちがいあう数百人の相手とすべてまったく無関係で、その無関係な関係を革命しようとして一度も誰も思ってみたことがないごとく、この宇宙に広がった限りもない渦状星雲も輝く星座もそこに生れた思考するさまざまな不思議な何ものかも、いいかな、互に怖ろしいほど巨大な無関係のなかにある。おお、巨大な無関係！」(『死霊』五章)

個体が、成素の離散と集合のダイナミズム、具体的には食や性のサイクルの渦中にあるとして、必然的に成素は他の成素と混在しながら、それぞれ別個ばらばらに散在していく。するとそこには「巨大な無関係」が現われる。弾劾裁判の蟹や津田夫人は、自己の延長として成素の所有権を主張していたが、その「自己確認」は留まることを知らず、最終項を見出すことはできない。最後に残るのは基底的な存在の「ざわめき」だけだ。逆にいえば、そのような本来は「無関係」なものを抽象的な自己は自らの成素として一方的に同定してしまうということもできる。首猛夫が黒川との対話で話していた「本来違った場所にあるべきものが、みんな同じ場所へ追いつめられてしまった！ そうなのだ。現代の優秀な青年達はみんな詰らぬ同じような場所へ追いこめられてしまったのだ」(三章)という言葉は組織論と存在論との交差を考える上で興味深い。その「本来ちがった場所にあるべきもの」を「同じ場所」に集めてしまう一方的な暴力行使に異議を申し立てるために、例えば弾劾裁判が設定されていた。

しかし繰返しになるが、彼らの「自己確認」の逆行に最終的な責任者を決定することはできなかった。第三は「最高存在こそ存在にほかならぬ」だ。

「俺達すべてがこの宇宙の事物からつくりだされて、その俺達すべてが存在のなかでその冷酷な意志によって『馴致化』されつづけているにもかかわらず、しかもついに何物によっても『馴致化』されることを頑強に拒みつづけてやまないところのその存在が存在だけにひたすら重なりあったかたち、つまり、存在からのみ存在ができるといった忌ま忌ましいほど無気味な、そして、腹立たしい永劫不変の単性生殖の秘密がある」(『死霊』五章)

第一の言い換えともいえるが、特に強調されているのが、宇宙(存在の次元)の外部の欠如である。『死霊』の存在論は汎神論ならぬ汎存在論的(とでも名付けるべき)性格が認められる。『死霊』世界にとって、世界は存在で満ち満ちている(註六)。それ故、存在の場において、存在は存在に作用し、存在は存在を産み、その自己触発的プロセスが無限に繰り返される。そしてその外部は存在しない。

序では組織と組織外とに引き裂かれたスパイに比せられる、個人と存在との引き裂かれた幽霊という境

界的な「われ」をみた。そこでの存在こそ外部なき「最高存在」である。そして、『死霊』が暴こうとしていたのは、いくつかの舞台装置を設置すれば、所謂スパイでなくとも幽霊でなくとも、あらゆる自己は、やはりサイクルと連鎖運動で蠢く「最高存在」と個体とに引き裂かれているということなのだ。というのも、「自同律の不快」は独立的に成立しているかのような自己に対し、「不快」の感性によって個体の内部に異和を摘発しようとするからだ。この異和の具体的な対象が、「死屍累々」であり犠牲になった精子群であり、ざわめき蠢く非人称の存在だった。比喩的にいえば、自己という組織体において「自同律の不快」の道具立ては、その自己に支配された成素をスパイに仕立て、外部への連絡線を仮構的に描こうとするのだ。こうして「自同律の不快」は自己のなかの他者（異和）を見出そうとする。

しかし、「自同律の不快」は自己への対抗手段であると同時に自己延命の原理としても機能してしまっていた。埴谷雄高の組織論では、密告者によるスパイ活動が、実は組織の指導者（三輪高志）の言説に触発された行動であり、組織から離脱することの困難を考察したが、ここでも同型的な難問が呈示されている。つまり、「自同律の不快」によって自己を批判し自己から身を翻そうとする「変転」への意志は、結局の処、虚膜細胞が二分、四分、八分されていったように、多数の自己と多様な自己を産み、自己の延命を帰結させる。「自同律の不快」によって自己の支配に足掻こうとすればするほど、自己は自己に囚われ、更なる自己を生み出してしまふのだ。

では組織内部を監視するセキュリティシステムが作動していることを考えたが、存在論レベルで、監視は、自己の権力性への対抗手段として用いられている。繰返しになるが、「自同律の不快」からもたらされる「気配」の察知や「見つけたぞ」が合言葉の弾劾裁判の舞台装置を描くことで、自己が把握しきれないような成素や基底で蠢いている非人称な存在からの監視の眼差しを仮構的に作り上げているのだ。しかし、「自同律の不快」の両義性によって、その試みは全的に成功したとは言い難い。「自同律の不快」は「存在の革命」のきっかけは作れても、決定打にはなれないのだ。

では、「自同律の不快」の限界に際して、「存在の革命」にはどのような他の選択肢が可能なのか。考えられるのは、存在の次元に回収されないような出現しなかった「未出現宇宙」の次元であり、その「未出現」や「無出現」の次元を支えている夢という現象　そもそも弾劾裁判も夢魔登場も夢という舞台で描かれた出来事だった　。そして何よりも忘れてはならないのが、『死霊』の最終目標とされ、埴谷雄高が最も重要視しながらも今尚謎めいている「虚体」概念であることが推測される。

埴谷はこれらの謎めいた概念を用いることで、『死霊』は基底的だと思われていた存在の次元さえ突き抜けようとしているように見える。つまり、「存在からのみ存在ができる」といった忌まじいほど無気味な、そして、腹立たしい永劫不変の単性生殖の秘密」を暴露した上で、それを超えて存在と未存在や無存在の境界面へと革命の希望は託される。「自同律の不快」以上に「存在の革命」を実践していく無出現　夢想像力（構想力）　虚体等の更なる対抗手段。これらは別の論考で引き続き考えていきたいと思う。

(註一) 埴谷雄高に食というテーマへの批判のきっかけを与えたのは、耆那(ジャイナ、ジナ)教の聖典に接したことが大きいように思われる。『死霊』三章完成時に書かれた「自序」(昭二二・一〇)には、「着ること飲むこと食うことはおろか呼吸すらその信徒達は禁じられていた」、その「餓死教団」のことが言及されている。埴谷の構想によれば、『死霊』は最終章近くに、釈迦とこの教団の始祖大雄との対話が書かれる筈だった。その意向は実現されなかったが、食を徹底的に否定した教祖への関心は『死霊』各箇所にも間接的に表れている。

(註二) 諸田和治「存在と不快 『死霊』をめぐって」/『ユリイカ』昭五三・三。

(註三) 森川達也『埴谷雄高論』、審美社、昭四三・九。

(註四) 鹿島徹『埴谷雄高と存在論』、平凡社、平一二・一〇。

(註五)「存在について」『薄明のなかの思想 宇宙論的人間論』(筑摩書房、昭五三・五)や小川国夫+埴谷雄高往復書簡「第七信 非在とのっぺらぼう」(『世界』昭六三・二)など。

(註六) ここで展開されている汎存在論には、人格神を否定し、自然即神の汎神論を展開したスピノザ哲学の影を見取ることができるかもしれない。埴谷は生涯、積極的にスピノザを語らなかったが、しかし昭和七年の豊多摩刑務所収監時代に、カントや西田幾多郎などとともにスピノザを読み、後年の大岡昇平との対談『二つの同時代史』(岩波書店、昭五九・七)において重要な哲学書としてスピノザ『エチカ』を挙げている。これらを考慮した上で、藤一也(『埴谷雄高 『農民闘争』時代をめぐって』、沖積舎、平一八・七)は「永遠の相」から、合田正人(「『存在の革命』をめぐって 埴谷雄高とレヴィナス」/『文芸研究』、明治大学文芸研究会、平一七・二)はコナトゥス(自己保存の努力)から、スピノザ哲学の『死霊』への影響関係を示唆していることは興味深い。又、『死霊』本編では津田康造の哲学として「あらゆる「もの」をそのあるがままの姿で眺めるといったスピノザ流の方式」と説明されている点は特筆に値するだろう。

(引用は『埴谷雄高全集』(講談社)を参照したが、ただしすべて新字・新仮名とし、拗音・促音も小字表記に置き換えた。引用文中の〔 〕は引用者による注記である)。

埴谷雄高、散在する存在の中で 『死霊』 統合計画  
<http://p.booklog.jp/book/35113>

著者：荒木優太

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/arishima-takeo/profile>

感想はこちらのコメントへ  
<http://p.booklog.jp/book/35113>

ブックログのpapier本棚へ入れる  
<http://booklog.jp/puboo/book/35113>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社 paperboy&co.